

Title	消息と雑報 (倍大號)
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1926), 7(71): 66-67
Issue Date	1926-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/161067">http://hdl.handle.net/2433/161067</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

1912年のナルフ彗星は240日前に

1914年のテラヴン彗星は800日前に  
発見されたといふ例が無いではないが、  
多分此のコマスソラ彗星は1927年の年末  
頃まで観測されるであらう。

◎さきに1925kの彗星を発見したザルク  
氏(ポーランド國クラコキ大學天文臺の)  
は、去る1923年九月一日21時46分(萬國  
時)に

赤経  $15^h 53. m 2$  赤緯  $+3^{\circ} 5'$  (1855年の  
分點)の位置に彗星らしいものを一つ見  
付けたといふ電報が歐洲の或る天文臺に  
は送られた。星の光度は6.0等だつたとい  
ひ、又、之れは4分時間に1°づつ東へ  
運動してゐたといふ報告なので、聞いた  
人は皆驚いたが、其の後何の報告も無い  
ので、多分之れは、何かの誤りか、又は  
一流星の破片か、或は極光の一片であつ  
たのかも知れない。(ちよ古い話である  
が、1916年五月四日にもペライン教授た  
ちが、僅か数時間の間、天に同様な奇怪  
なものを見たといひ、ミスEグランシー  
は軌道計算までやつたことがあつたけれ  
ど、やはり、誰も其の後之れを見なかつ  
たので、之れが本統の天體であつたか否  
かは今だに判明しないまゝになつてゐ  
る。)

◎ニウツミン彗星 (1916 II) が近づいて  
来た筈なので、「今にも誰かに発見され  
るだらう」と、各國の學者は期待してゐ  
る。此の彗星は1916年二月24日にロシ  
アのニウツミン(Neujmin)氏が発見した  
もので、同年の六月まで観測が行はれ、  
其の結果、週期5.42年の彗星であること  
が知れた。1921年には、地球との位置の  
都合上、発見されなかつたが、此度は観  
測に都合悪くないから発見は可能性が多  
い。東京の神田氏からの報知によれば、  
近日點通過は多分1927年一月八日らしく  
其の豫想位置は、去る十一月頃ほしゝ  
座、同十二月にはおとめ座に入り、1927  
年一月中、スピカ星の附近を西西南へ順  
行中である。但し、光度は12等級の程度  
であるから、60センチ以上の反射鏡で無  
ければ観望は困難であらう。

◎近着報によればニウツミン彗星は発見  
された。発見者は又ニウツミン氏、場所  
はロシア國シメイス天文臺。時は1926年  
十一月五日1時37.9分(萬國時)。星は  
赤経  $10^h 10^m 56s$  赤緯  $+18^{\circ} 29'$  分點1926.0  
光度は14.5。但し急激に増光しつつある。  
近日點通過は1927年一月16.5日(萬國時)  
に近い。本會アレテン第94號を見られよ。

## 消 息 と 雑 報

### ○木星の四衛星の變光 米國で天

體光度測定の大家 J. Stebbins (ステビ  
ンス氏——キスコンシン大學天文臺長) 氏  
が、1926年の夏、カリフォニアのリク天  
文臺に滞在し、精密な光電光度計 (Pho-  
toelectric photometer) で観測したところ  
によると、木星の四つのガリレオ衛星は  
何れも多少の變光星であつて、其の變光  
週期は公轉週期と等しいものらしい。即  
ち、

衛星	週 期	變光の範圍
1	1.77 日	0.24 級
2	3.55	0.30

3	7.17	0.13
4	16.75	0.10

又、位相による變光は

第2衛星は	位相角1°につき	0.13等級
第3衛星	同	0.13
第4衛星	同	0.25
第1衛星	(観測不充分)	

しかるに

我が月は 位相角1°につき 0.11等級  
である。要するに此の四つの衛星は種々  
の點に於いて月と同様のものらしい。  
(Pub. A. S. P. 225)

## ○キルソン山からの視差観測だより

最近、同天文臺の A. Van Maanen (ダンマーネン) 博士が報告した所にさるさ、ドイツ國ハイデルベルヒ天文臺の M. Wolf (ナルフ) 氏が以前から多く發表してゐる大固有運動星を測定し視差、固有運動、絶對光度等を決定した其の結果は、

星	寫眞 光度	視差	絶對 光度	固有 運動
Wolf 1056	12.9	0."078	+12.4	1."69
同 110	13.2	0.042	+11.3	2.43
同 437	12.7	0.107	+12.8	1.03
同 611	16.0	0.032	+13.5	1.54
同 612	14.7	0.032	+12.2	1.43
同 1106	13.4	0.040	+11.4	2.14

皆我が太陽系から 100 光年以内にある近い星であるが、絶對光度 何れも 10 等級以下さいふ 珍らしいものばかり。(我が太陽の絶對光度は +4.9)

又、ボン調査の中の B. D.—12°4523 さいふ九等半の一微星を、W. S. Adam (キルソン山天文臺長 アダムス) 氏が「絶對光度が非常に小さいものらしい」その豫想の下に、前記ダンマーネン氏に視差観測を依頼した。其の結果、視差は 0."350 (即ち距離 9.3 光年)

絶對光度は +12.2 等級  
さなつた。アダムス、ジョイ兩氏が星のスペクトル観測から得たものは、

視差 0."344, 絶對光度 +11.8  
さなり、ダンマーネンのものとよく一致する。——此の星は視差の大きいこさ、即ち距離の近い點に於いて、全天に於ける第 6 番目の星である。即ち

### 最近距離の恒星表

番號	星 名	光度	視差	距離 (光年)
1	センタウル座最 近星	10.5	0."802	4.07
2	同 ア星	0.3	0.759	4.30
3	バーナード星	9.7	0.533	6.12
4	きりん座 H22 番星	7.6	0.403	8.09
5	シリウス	-1.6	0.376	8.67
6	B. D.—12°4523	9.5	0.350	9.31

又、ダンマーネン氏は、1913 年に現れたや座新星の視差を測定した。結果は視差 = 0."013 距離 = 251 光年

である。故に此の新星が爆發したのは西暦 1662 年のことであつたのだ!!

## ○諏訪とキルソン山との太陽観測比較

諏訪では三澤勝衛氏が毎日太陽黒點を數へ、之れを本會のブレテンに發表してゐる。米國キルソン山上で黒點個々の位置を磁力を測定してゐる。何れも黒點群には番號を附してゐるが、最近報により、1926 年七月と同八月分のものを比較して見るさ、

諏訪での 黒點群 番 號	キルソン山での		
	黒點群 番 號	太陽面 緯 度	磁力 (ガウス)
411	2609 ?	+ 9°	600
413	2610 ?	-23	900
414	2613	-21	400
415	2617	-15	1500
416	2611	-21	200
417	2621	+ 7	—
418	2623	-14	—
419	2624	-13	700
421	6627	+14	—
422	2630	- 9	700
423	2629	+18	2200
424	2631	+22	2100
427	2636	-18	2500
428	2638	-11	3300
429	2642	+21	1100
430	2643	-22	1600
434	2653	-20	2700
435	2655	-22	1600
436	2657	-18	—
437	2656	-18	3100
438	2659 ?	-11	1600
439	2661	+14	—
440	2664	- 9	2700
441	2663	+19	1600
442	2660 ?	+24	—
443	2662	-25	1100
444	2665	-20	2200
445	2666	+19	1900
446	2667	-20	1800
447	2670	+12	—
448	2673	+24	900
449	2674	-18	1700